

「PCAGIP 法とは何か」

講師：村山正治

1. 今なぜ PCAGIP か？

ケースカンファレンスは心理臨床家の養成訓練には、大変重要な場である。しかし必ずしも事例提供者に役立つ場となっていない。ときに傷ついてそのフォローに苦勞することもまれでない。

助言をもらうだけでは、なかなか対人援助職としての成長は望めない。

対人援助職が自分自身で問題解決の糸口をみつけたり、新しい視点から事態を眺めたり、あるいは、事例に取り組んで行き詰っている自分自身の感情に付き合えるような事例検討法が長年望まれてきた。つまり対人援助職がエンパワーされ、自分で問題を探る視点を身に着けられる心理的成長の視点を基盤にした事例検討の方法が求められてきたのである。PCAGIP法はそのために開発された方法である。

村山・中田は長年、エンカウンターグループ体験を重ねてきている。カンファレンスの場をグループやコミュニティの場としてとらえたり、新しい構造や工夫を加えて生まれてきた方法である。司会・コメンターと呼ばないでファシリテーターと呼んでいることもその一つである。

事例提供者に役立つヒントが生まれてくるように、安心して発言できる雰囲気を作ると、参加メンバーが持っている智恵が自然に浮かび上がり、グループメンバー間の相互作用から、事例提供者に役立つヒントを生み出す新しい方法として開発されたものである。



「新しい事例検討法
PCAGIP 入門 (2012)」
村山正治・中田行重 (共著), 創元社

「新しい事例検討法 PCAGIP入門」はしがきより

2. PCAGIP 法 早わかりチャート

I. 新しい視点

- ①基本仮説・PCAの人間観・関係論を尊重する
- ②事例提供者の自己実現の方向性を大切にする
- ③カンファレンスの場をコミュニティとみなす
- ④カンファレンスの場をエンカウンター・グループの場とみなす
- ⑤ファシリテーターは事例提供者を含む参加者全員の安心感を高め、相互作用を促進する
- ⑥参加者は、事例提供者と共同で、解決の方向性を探索するリサーチ・パートナーである
- ⑦プロセスを尊重する
- ⑧結論が出なくてもよい。事例提供者のヒントになることが出ればよい

II. 定義

事例提供者の提出した簡単な事例資料をもとに、ファシリテーターと参加者が協力して参加者の力を最大限に引き出し、その経験と知恵から事例提供者に役立つ新しい取り組みの方向や具体的ヒントを見いだしていくプロセスを学ぶグループ体験である。

III. 構造

- ①グループは、事例提供者、ファシリテーター、記録者2人、メンバー8人程度で構成する
- ②情報の可視化と情報共有のための黒板（ホワイトボード）2枚を用意する
- ③参加者は、全員に黒板（ホワイトボード）が見えるように円陣をつくる

IV. プロセス

ファシリテーターの場面構成として、次の約束をメンバーに伝える。

- ①事例提供者を被告にしない、批判しないこと
- ②記録をとらないこと

●第1ラウンド

- ①事例提供者は、事例を提供した目的、困っていること、どうしたいかを簡単に述べる
- ②参加者は、事例提供者と事例をめぐる状況を理解するために、事例提供者に質問し、その応答を記録者が黒板（ホワイトボード）に記録する
- ③発言者は順番を決めて、1人ずつ順番に発言していく。その発言に刺激されて、次の発言者が質問していく連鎖が展開する。2～3巡程度で、1時間ほど経過する
- ④ファシリテーターは、ほどよいところで、黒板（ホワイトボード）の状況を整理する

●第2ラウンド

- ①第1ラウンドより事例提供者、参加者間に安心感が出てきて、雰囲気や和らぐ
- ②情報の整理に伴い、質問から深い質問、事例提供者に関する個人的質問などが出てくる
- ③ファシリテーターは、多様な見方が出てくるように、自由な雰囲気をつくる
- ④50分程度で、事例提供者と事例をめぐる状況の全体像が出てくることが多い。
これを「ピカ支援ネット図」と呼んでいる。ファシリテーターは、これを整理し、メンバーに伝える。これで事例提供者に必要な方向性が見えてくることが多い

●クロージング

- ①このピカ支援ネット図をみんなで共有しながら、参加者各自の感想を述べてもらう
- ②事例提供者がPCAGIP体験プロセスの感想を述べてもらう機会をつくる。

V. 結果

- ①みんなでつくりあげるプロセスを体験する
- ②多様な視点が出てきて、事例提供者や事例、状況理解の視点が広まり、深まる
- ③事例に取り組むヒントが多数生まれてくる
- ④安全な雰囲気の中で、浅い触れ合いから、深い相互作用が生まれる。
予想外の展開が生まれることもある
- ⑤みんなで1つのことを探究する一体感が生まれ、満足感・充実感が出てくる

VI. 要約

事例提供者を被告にしない、安心できる独自のグループ構造を設定する。その中で、ファシリテーター・参加者が事例提供者の簡単な事例資料を理解するグループプロセスが展開する。その過程で、事例理解の多様な視点が生み出され、それは、事例提供者に役立つヒントになり、事例提供者が元気に事例に取り組んでいく力が生まれてくる。

VII. 現在の展開の状況

- ①臨床心理系大学院生のカンファランスの事例検討・臨床訓練
- ②自治体の管理職の部下指導
- ③病院の看護職の部下指導
- ④学校教職員の部下指導・生徒指導の事例検討
- ⑤臨床心理士の事例検討
- ⑥いのちの電話相談員の事例検討
自治体・教育・福祉・矯正・看護領域の管理職の部下指導。
事例検討、メンタルヘルス研修に展開している。

講師 村山正治先生プロフィール

九州大学名誉教授、東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理学専攻主任、
関西大学臨床心理士専門職大学院客員教授

専門分野：人間性心理学、パーソンセンタード・アプローチの理論と実践、
スクールカウンセラー事業の発展と評価研究

関連団体：日本臨床心理士会常務理事、日本臨床心理士資格認定協会理事、
日本人間性心理学会理事、学校臨床心理士ワーキンググループ代表

主な出版物：カウンセリングと教育（ナカニシヤ出版）、*エカクシ・グループとユニファイド・アプローチの展開*（*）
新しいスクールカウンセラー—臨床心理士による活動と展開（*）、*ロジャースをめぐって—臨床を生きる発想と方法*（金剛出版）、*ロジャース選集 上・下*（誠信書房）、*臨床心理士のスクールカウンセリング*（*）、*マンガで学ぶフォーカシング入門*（*）、*新しい事例検討法 P O A G I P 入門*（創元社）*学校現場に役立つスクールカウンセリングの実際*（創元社）他多数。



書評

村山正治・中田行重編著
『新しい事例検討法
PCAGIP 入門』

—パーソン・センタード・アプローチの視点から—

(創元社, 2012)

文教大学
土沼雅子

本書は、村山正治先生が考案された、新しい事例検討の方法を村山先生をはじめ、先生と交流のある方たちが、わかりやすく、平易な文章でまとめられた入門書である。

村山先生と聞くと、学会でお会いした時の楽しそうな先生の笑顔がすぐに浮かんでくる。権威的な近寄りがたさはみじんも感じられない、受容的な雰囲気、年齢不詳の若々しい、エネルギー感あふれる先生という印象を私は持っている。その先生が考案されたPCAGIP(ピカジップ)法とは一体どういうものか、学会のプログラムでその文字を目にした時から、心のどこかにひっかかっていた。

今回、その著書を手にすることができ、時を得た思いである。なぜなら、私は大学院で実習のケース・カンファレンスを毎週行ってきた。事例検討会であり、集団スーパービジョンともいえるものである。

修士課程1年生、2年生と博士課程をあわせて40数名の学生とともに教員が3~4名という構成である。やり方は従来型的事例検討法をとってはいるが、発言をあまりしない1年生の存在や事例提供者の資料作りの大変さや、それを長々と聞くことの忍耐など、教員の時間的な負担も大きく、いくつかの問題を感じているところであったからである。

はじめてこの本を手にした時、この本の表

紙の可愛らしさに嬉しくなった。表表紙には金魚が4匹、金魚鉢に入っている。裏表紙には金魚鉢から逃げたのか、自由な1匹の金魚が描かれている。表紙のクリーム色とこれらの赤い金魚の装丁がやさしさと温かみを醸し出している。さらに帯には「PCAGIPとは——Iがないのに愛がある事例検討法」と書かれている。「愛がある事例検討」とはまさに私が求めているものかもしれない。これら表紙が内容のすべてを語っているように思われ、わくわく感で本書を開いた。

「まえがき」には「PCAGIP法は対人援助職のための新しい事例検討の方法である」と書かれている。「対人援助職」とは教育、保育、福祉、医療、看護、司法をはじめ、さまざまなカウンセリング、心理臨床、就職支援、その他の産業に関する領域や矯正領域、NPO、ボランティア活動など、幅広い領域にまたがっている。」著者自身も、スーパービジョンあるいはケース・カンファレンスを行っても、受ける側は受け身になってしまい、自分で考える力がつきにくく、対人援助職としての成長が思うようにはいかないことに問題意識を持たれていたようである。「つまり対人援助職がエンパワーメントされ、自分で問題を探る視点を身につけ、自分で事例を抱えて対応できるようになることは、言ってみれば単なる事例対応の方法ではなく、その人自身の心理的成長であるのだが、個の心理的成長の視点を基盤にした事例検討の方法が求められてきたのである。」その結果、開発されたのがPCAGIP法というわけである。

本書は、第1部から第4部で構成されている。第1部は理論編(1章~4章)、第2部は実践編(5章~8章)、第3部はPCAGIP体験記、第4部は村山先生の講演「心理臨床について語る—教育、研究、心理療法」となっている。

まず、一番興味を持った第1部から紹介していこう。PCAGIP(ピカジップ)の“PCA”

はロジャーズ (Rogers, C.R.) の考えとアプローチとして知られているパーソン・センタード・アプローチ (Person-Centered Approach) を表し、“G” はグループ (group)、“IP” はインシデント・プロセス (incident process) の意味である。インシデント・プロセスとは「学校現場でよく利用されている事例検討の方法で、発表者の短い報告に対して参加者が質問をおこない、出来事を確認し、その背景の事実を調べ、問題点を決め、その対応について考えるものである。」第3章には開発の経緯が述べられている。その一つは「事例提供者を被告にしない、安全な事例検討会の必要性」があげられ、私自身も日ごろから院生の養成訓練という視点で、萎縮させずにいかに成長させるかに配慮、苦心しているところなので共感できる。また学会発表などで事例発表者が傷ついたり、流派間の闘争のような場面も目にすることもあったので事例検討の目的を明確にしておく必要も常に感じてきた。しかし私の場合はその問題意識をしっかりと形にすることはなく、自分の心の中にとどめおくだけであったが、著者がしっかりと形として開発されたことに敬意の念を覚えずにはいられない。

第2部は実践編であり、具体例がわかりやすいものとなっている。

第5章では大学院生への実践が逐語記録として書かれているので、その場に身を置いたつもりで読むことができ、ファシリテーターの発言や第1ラウンドのまとめ、第2ラウンドのまとめかたなど参考になった。

第6章も大学院生への実践であるが、金魚鉢にも座り方はいろいろなだと構造図が参考になった。第7章は教師への実践、第8章は企業管理職のための事例検討となり、コミュニケーションの場の必要性が述べられている。

私は看護師や教員にアサーション・トレーニングの研修をする機会があるのだが、やはり課題解決の会話だけではなく、関係維持的

な会話の大切さを今の時代に感じている。PCAGIP法という安全な枠のなかで自由に発言する機会を増やすことは、どの援助職の人々にも必要なことであろう。アサーション・トレーニングにおいてもプラスのフィードバックはするがマイナスはしない。この安全感の中で人は自分らしく成長していくのである。

第3部は大学における実践、職場、ワークショップ、PCAGIPとフォーカシングなど体験記が述べられている。個人的には大学における実践がとても参考になった。PCAGIP法は120分は必要のようだが、大学の授業は90分なので、どうするのが良いかと考えながら、読み進めていたが、小グループ・ディスカッション型カンファレンスもありだと思った。私はゼミやグループ・アプローチの授業ではこの方式をよくとっているのでよく理解できた。

第4部講演では村山先生の柔軟で、温かなお人柄や人間観がよく出ていた。私も「はじめに課題意識ありき」の研究指導を行ってきたのでわが意を得たりの気持ちになったりした。

PCAGIP法は事例検討会以外でも使えるものである。私はさっそく、この4月からこの方法を取り入れていくつもりである。精神分析家、家族療法家の教員もそれぞれの事例検討の方法を自由にやってみて、院生たちの感想を聞いてみたいと考えている。

「優れたケース・カンファレンスの場は参加者全員が出会うコミュニティになっているであろう」私の好きな言葉〈連理の枝〉がイメージされる。一人一人が自分らしいありかたでしっかりと根をおろし、一つの目的に向かって天空へ伸びていき枝を張り、枝と枝がふれあい、絆となるイメージである。

多くの臨床家や対人援助職の人たちに読んでもらいたい著書であり、知っていただきたい方法である。しかし、同時に多くの実践を繰り返しながらまだ修正が加えられていく可能性も必要性も感じられた。

村山正治先生 プロフィール

東京都生まれ（1934年2月3日）。専門はパーソンセンタード・アプローチ（PCA）の理論と実践（エンカウンター・グループ、フォーカシング）。スクールカウンセラー事業の発展と評価研究（学校臨床心理士ワーキンググループ代表）。教育学博士。臨床心理士。

<経歴>

- 1958年 京都大学教育学部卒業
- 1960年 京都大学大学院教育学研究科修士課程修了
- 1963年 京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得後退学
京都市教育委員会指導部カウンセリングセンター カウンセラー
- 1965年 京都市教育委員会指導部カウンセリングセンター 主任カウンセラー
- 1967年 九州大学教養部助教授
- 1972年 Center for the Studies of Person, Visiting Fellow (ロジャース研究所)
- 1974年 九州大学教育学部助教授
- 1985年 Sussex 大学 UCLA, Visiting Professor
- 1986年 九州大学教育学部教授
- 1989年 九州大学評議員
- 1990年 九州大学教育学部長、同大学院教育学研究科長
- 1992年 九州大学評議員
- 1997年 九州大学定年退官、九州大学名誉教授
久留米大学文学部教授
久留米大学大学院比較文化研究科後期博士課程指導教授
- 1999年 東亜大学大学院総合学術研究科後期博士課程指導教授
- 2003年 東亜大学定年退職
九州産業大学大学院国際文化研究科教授、臨床心理センター所長
東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理学専攻客員教授
- 2009年 九州産業大学定年退職
- 2010年 東亜大学大学院総合学術研究科教授臨床心理学専攻主任
関西大学臨床心理専門職大学院客員教授
21世紀研究所主宰

現在に至る

<受賞>

- 日本心理臨床学会 学会賞受賞（2002年）
- 日本人間性心理学会 学会賞受賞（2008年）

<主な著書>

- 『カウンセリングと教育』（1992） ナカニシヤ出版
- 『エンカウンター・グループとコミュニティ パーソンセンタードアプローチの展開』（1993）ナカニシヤ出版
- 『新しいスクールカウンセラー 臨床心理士による活動と展開』（1998） ナカニシヤ出版
- 『ロジャーズをめぐって 臨床を生きる発想と方法』（2005） 金剛出版
- 『新しい事例検討法 PCAGIP 入門 パーソン・センタード・アプローチの視点から』（2012） 創元社
- 『PCAグループ入門 自分らしさをみとめる』（2014） 創元社